

学会だより No. 81 2005年6月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

第62回哲学会大会のお知らせ

今夏は下記の要領で第62回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2005年6月25日（土） 13：30～16：45

会場：上智大学7号館14階特別会議室

プログラム

研究発表 13：30～15：30

竹田信弘（本学博士前期課程）

「非-我」とは何か

フィヒテ『全知識学の基礎』（1794年）の第二原則をめぐる考察

田内千里（本学中世思想研究所職員）

アウグスティヌス『告白』における涙について

講演 15：45～16：45

渡部 清（本学哲学科教授）

明治40年の实在論

夏目漱石と西田幾多郎

懇親会 17：30～19：30

会場：上智会館3階第1会議室

会費：3,000円

講演要旨

明治 40 年の实在論

夏目漱石と西田幾多郎

渡部 清（本学哲学科教授）

夏目漱石も西田幾多郎も東京大学哲学科で同じ時期に、同じ教員たちから哲学を学んでいる。英文学科学生として漱石が東京大学に入学したのは 1890（明治 23）年であり、学部卒業が 3 年後で、さらに大学院に進んでいる。他方、西田の場合は哲学科選科生として 1891（明治 24）年から 95（明治 28）年まで在学していたから、学生時代に何らかの交流があったとしても不思議ではない。両者の交流はほとんど知られていないが、イギリス留学中の漱石に西田が送った葉書があるといわれており、大学卒業後も哲学関係のどこかの場で、何らかの機会に、両者が交わっていたと思われる。実際に漱石が留学するのは明治 33 年であり、そのときの西田は金沢の第四高等学校教授であった。

哲学の専門家ではない漱石の实在論は『文学論』と『文芸の哲学的基礎』および『創作家の態度』などに見られ、最重要な『文芸の哲学的基礎』が明治 40 年の作である。そこでの主題は真に实在するものは「意識」だけとされ、意識の志向作用とその分化が進化的に、また現代の現象学的に語られる点に注目すべきものがある。そうした文学者漱石の意識現象のみを真の实在と見る哲学的見解の模範はショーペンハウアーとハルトマンに求めることができると考えられる。

同じ明治 40 年に「哲学雑誌」に西田が発表した論文「实在に就ひて」は大乗仏教的認識論および存在論として理解されるべき面を多く含むが、意識を真實在とする観念論的ないし唯心論的な思考に両者の共通性を見て、少しく両者の比較を試みることにする。

研究発表要旨

「非-我」とは何か

フィヒテ『全知識学の基礎』（1794 年）の第二原則をめぐる考察

竹田信弘（本学博士前期課程）

フィヒテは、『全知識学の基礎』（1794 年）において、全ての人間的知の端的に無制約的な、絶対的第一原則を、「自我は根源的に端的に自己自身の存在を定立する」という命題に表す。これは、証明されることも、導き出されることもできないような命題である。「自我に対して端的に非-我（Nicht-Ich）が反立される」という第二原則も同様である。この二つの相打ち消しあう原則は、第三原則「自我は自我の中において可分的自我に対して可分的非-我を定立する」において調停され、意識の同一性が確保される。だがフィヒテによれば、この第三原則においては、自我も非-我も自我の根源的活動の産物として自我の中に見出される。ならば、ここで言われる非-我は、厳密には、自我の非-我、私という意識の中における私でないものにすぎず、自我と識別する根拠が非常に乏しいということになってしまう。

フィヒテ知識学の難解さは、それが端的に無制約的な原則に基づいていたとしても、知識学の真の妥当性は、探求が終了した後、その現実性によってしか示され得ないという点にある。

それゆえ、非-我をめぐる困難も、『全知識学の基礎』という著作全体の主張を把握した上で、見返され、検討されねばならない。

まず、「表象の演繹」においては、直観（Anschauung）が語られているにもかかわらず、理性・悟性・構想力という道具立てで非-我と自我の関係が論じられている。これはなぜか。この著作においてフィヒテが大きな影響を受けているカントは、感性の次元を設定した上で直観について語っている。だが、フィヒテはおそらく意識的にそれを避けているのである。

次に、第三部「実践的学の基礎」において、第二原則の再検討がなされている。ここにおいては、自我の「努力」（Streben）という概念が非常に大きな役割を果たしている。自我の「努力」という視点から第二原則が見返されることで、非-我は、どのような仕方、どのような位置付けのものとして提示されるのだろうか。

本発表では、非-我をめぐる問題を、この二点に的を絞って考察する。

アウグスティヌス『告白』における涙について

田内千里（本学中世思想研究所職員）

涙は一般的に悲しみの感情に起因する生理的現象と考えられるが、キリスト教作家たちはそれとは別の意味を込めた。たとえば、西方キリスト教の修道制の基礎文書とされるベネディクトゥスの『戒律』は日々の祈りにおいて涙を悔悛のしるしとして求めているし、イグナティウス・デ・ロヨラはミサの最中に神からの強烈な愛を受けて流したおびたしい涙を涙の賜物と呼んでいる。アウグスティヌスも『告白』第9巻において讚美歌を聞いて敬虔の感情（*affectus pietatis*）がわき起こり涙したと述べている。涙は宗教的な感情の肉体的表徴なのである。しかし、アウグスティヌスは同書において宗教的な感情から涙を流す場面に限定されない涙についても言及している。その一つが親しい人の死によって引き起こされた感情からアウグスティヌスが流した涙である。本発表では、一緒にマニ教に傾いた友の死（第4巻）とアウグスティヌスの母の死（第9巻）を考察する。受洗をはさんで隔てられるこの二つの場面を比べると、『告白』における涙はその本質あるいは意味の点で変容していることがわかる。この考察によって、涙の経験の本質が、神との関わりの中で、人との関係性を示す「ともに（*con-*）」という接頭辞が付される言葉で表現される「心（*cor*）」のあり方に必然的に結び付いていることが明らかにされ、さらに、神のもとで私たちが感情を持つということがどういうことであるか、なぜ涙が宗教的な感情の表徴たりえるのかについても見通しが得られるであろう。

第61回哲学大会報告記

昨年の10月23日（土）に第61回哲学大会が催されました。この大会では、「清沢満之『純正哲学』における「現実性」理解と関係論」と題する角田佑一氏の研究発表と、「ホワイトヘッド『過程と実在』の構造」と題する駒沢幸三郎氏の研究発表が行われたほか、シンポジウムが催されました。テーマは「古代ギリシアはいかに生きるか？」というもので、土橋茂樹氏（中央大教授）、森一郎氏（東京女子大助教授）、塩川千夏氏（成蹊高校教諭）を提題者にお迎えして、フロアも交えての活発な討議が行われました。なお、三人の提題の内容は『哲学論集』第

34号に掲載される予定です。どうぞご期待ください。また、クラウス・リーゼンフーバー氏(本学哲学科教授)より「学知の根拠・意義・目標 フィヒテにおける学者論の発展」と題した講演をいただきました。以下に報告記を掲載いたします。多くの参加者を得て、大会は盛況のうちに開催されたことをご報告申し上げます。